

することと機械が多少入っても労働時間にキマリがないこと、親の反対もあって経営の全部もしくは一部をなかなか任してもらえないことなどの不満や不安がいちばん根底にあります。それ以外に社会的な要因も少なくありません。

そのなかでも家や部落の人間関係をめぐると古い非民主的な因習もまだ根強いわけですが、家屋の構造にしても、だだっびろくでうす暗い、個室がとれなくてプライバシーの確立もむづかしいといった非合理的、非近代的なままの場合が非常に多い。生活環境にしても道路や医療、

若い広場

「おもしろい帰るか。その声に思わず時計を見る。午前一時を回ったところだ。もうこんな時間、話に夢中になり時のたつのを忘れてしまった。これはわたしの所属する息吹会でのひとコマである。総員一八人、真剣に農業に取り組んでいる者だけの集まりである。毎月十日の会合で発足して、三月月足らずではあるが、わたしたち若者にとっては唯一の心のよりどころなのである。

俺たちは農業をやる

「息吹会」とともに

村上 国昭（二十二才）



乳牛を親父から一手に任せられ、今年の秋は畑のど真中に畜舎を建てるとバイトを燃やすC後輩。皆んな鼻息の荒い若ものばかりである。わたしもボヤボヤしゃべりながらおれんなと会合のたびに身の引き締る思いがする。しかしこんなわたしにも悩みはある。まず資金不足である。何かひとつやろうと思えば

保健衛生の面での農村の立ちおくれは申すまでもありません。レクリエーションや文化施設についても同様です。要するに住みよく快適な農村生活というにはほど遠い現状です。都会もまた住宅難や交通まひ、公害などで決して住みよくなるはずはないのですが、それでも動きとたのしみの少ない、よほどだやうな農村の生活よりはまだマシだといふうに、おおかたの青少年が感じとっているところに、たとえ経済は成長しても病める社会である現代の問題が大きくよこたわっているわけですね。

七ケタの金がある。六ケタではもはや通用しえない。先に述べたC後輩も資金面で相当苦勞している。多額の長期低利の資金がない限り急速な発展は望めないだろう。

わたしが農業に取り組んで五年になるが、どうやら経営の目標が見えてきた感じがする。現在の経営は水田一・五畝、畑一・二畝、乳牛六頭だが、ここ四年間に一〇頭に増やし、経営を一応安定させ資本の蓄積を図ると共に技術を研ぎ、そして酪農専業へと進むつもりである。

事業となれば最低二〇頭はいなければ飯は食ってはいけない。できれば三〇〜四〇頭まで行ってみたい。〇頭まで行ってみたい。そうすれば大型機械の導入や、土地も五〜一〇畝が必要になってくる。百姓の嫌いな者ほどどんどん出て行けばよいのである。後にはわたしたちがドンと引き受けよう。国土が狭く、貿易自由化がそこまできている今日、菅農の規模拡大をおいてはかに日本農業を救う道はない。

わたしは後継者不足、多いに歓迎である。これからは生半可な気持ちでは百はできない。農業をやる以上それこそ大地にしっかりと根を下ろし、明日の郷土を背負って立つという愛情と開眼がなければダメだと思ふのである。（菊池郡酒水町福平）

日本農業の自覚と誇りを

しかし農業は重要な生産部門です。もし次代の担い手を十分に確保できず、またその人たちがよろこんで自信と誇りをもって働けるような生産と生活の条件をつくりだすことに成功しない場合は、農業はいよいよ危機にひんし、農村は荒廃するでしょう。そうなる不幸はひとり農村ばかりでなく社会全体に及びます。日本の農業は生産性が低くてコストが高いから、外国から安い農産物をどんどん輸入すればよいなどという議論が、一見合理的な調子でよくいわれますが、そんな簡単なものではありません。そういう形で日本の農業を衰退させれば、結局国民は非常に苦しむことになりましう。したがってそうならないためには、

日本の農業はぜひとも近代化をおしすすめて、質のよい農産物を豊富に安く供給する体制をできるだけ早くきづかねばなりません。そのためには、後継者諸君にがんばってもらい必要があります。ただその場合、青少年流出の原因が、経済的、経営的、社会的な側面にわたってひろく深く及んでいるわけですから、それらの問題に対して、後継者の世代は地域の指導者や老壮年とともにとりくむ覚悟が大切でしょう。

そこで現代の農村青少年は、技術や経営だけに専念すればよいというものではなく、決してないと思ふべきです。4日の時代はまだ技術を勉強することでよかったかも知

れない。農協青壮年部も、農協の体質改善や共販対策などに力を注ぐことで一応の役割は果たせたい。しかしこれらの農村青少年は、地域の構造改善や開発計画をどうするかということ、米価の成り行きやミカンの見直しなどから考えて、地域の生産対策や経営対策に真剣にとりくむこと、畜産が今後日本農業の最大のネックだとすれば、飼料自給問題を中心にしてどう拡大してゆかかということなど教えなければいけません。そういって広い問題にとりくんでほしいと思います。たとえ小さくともひとつひとつ実践的に積み上げてゆくことでしょ。そのなかではじめて農村青少年のほんとうの自主的な精神がきづかれてくるでしょう。

経済の高度成長の期間に農村はあまりにも変動的で、ムードに流されすぎた感があります。もちろん農村の非合理性と立ちおくれは是正されなければなりません。人間生活の根本的なあり方に立ち返ってみると、農村のもつゆとり自然との密着性、本質的に健康な面など長所が少なくありません。それらを最大限に生かしながら人間尊重の農業と農村をうちたてることによって、ますます病的で不健康化する現代都市に反省の契機をあたえることも可能かと思ふべきです。

そういうことを認識し、実行できるのは農村の青少年です。諸君に深く期待してやまない次第です。

第二章 ヘルポくふるさとの大地に立つ

山に生きる若者たち

―球磨郡山江村の屋形林研クラブ―



★下刈にはげむクラブ員たち

「なんでも識ってやろう」

球磨郡山江村は、総面積の約九〇％が山林という林業の村である。この村の屋形地区に一三名の若者たちのグループがある。名称は山江村屋形地区林業研究クラブ。メンバーの平均年齢は二〇才、そして全員が長男である。平均経営面積は約三〇畝。といっても親との共同経営だが、山での仕事の殆んどは、この若者たちの肩にかかってくる。

「実に熱心です。クラブ員が二人でも三人でも顔をあわせると話に出るのは山のことばかり。月二回定期的に研究会を開いていますが、一昨年からは県で行なわれている山村中堅青年技術交流派遣研修生、いわゆる国内留学にも、三年連続してクラブ員が行くなど基礎も一応できていますし、それに実際に経営に当たっているわけですから、質問も鋭いですよ。時には、実際はこうだったと、理論との食い違いを逆に指摘されることもあるんですよ。」

腰弁て牧場へ通勤 産山村農協酪農部山鹿区牧場は、県の構造改善事業の一環である大規模草地改良事業区として、昨年の夏発足した。こ

この道にたずさわるようになったという若者もいる。ともすれば近代化の遅れがちな山村生活、自然まかせの旧態然とした経営方法などは、夢多い彼等を魅するには、あまりにもものたりなかったのだ。

肥培管理で短期伐採へ

「しかし今は林業を選んではよかったと堂々といえますよ。」と若者たちはたくましく胸を張る。「サラリーマンになった友達に羨ましいと思つたこともありました。しかし、サラリーマンは人に頭を下げなければならぬ。停年もある。僕たちは自分が社長です。停年もありませんからね。」とメンバーは朗らかに笑いあう。「実際に経営にたずさわって、実により甲斐のある仕事だと感じます。山は素直です。やり方次第では、ほとんど大きく育ちますからね。」とメンバーの富岡隆治君はいう。昔ながらの「山はほっておいても育つ」といったような経営感覚が残っているという程、逆に彼等には、それを一つ一つ改革してゆく楽しみがある。山林の測量もその好例だ。三年前のことである。地区の林業経営者の中には自分の経営面積もはっきり知らないという人が多かった。さっそく彼等がとりくんだのが測量技術の習得。毎月十五日を農休日と定めて、この日を技術習得に当

てたのだが、はたの目には「若いモンが集まって遊んどる」としか映らなかつたらしい。白い目を向けた人もいたという。今では、この技術が役立つ地区内の山林測量にも力を貸し、自分の山を知らないという粗雑な経営をする人は陰をひそめるまでに変りつつある。

反面、彼等の新しい考え方や方法が、スムーズにとり入れられないことも多い。肥培管理に例をとっても、山に肥料をやるなど勿体ないというおじいさんの反対があるといった具合だ。「だから自分に任せられた範囲で実績をあげ、家族にも納得して貰い、そして広く地区内にもという形で進めたい。」と考え方も堅実だ。現に、彼等の地道な努力の積み重ねが、優良品種の改良に、また肥培管理による短期伐採の方向へと、着実に浸透しつつあるのは事実で、この林研クラブの成長に、村や森林組合が寄せる期待も大きいようだ。

それがどかに草をはむ風景は、カラー絵葉書などで見る北欧の牧場にちよつと似ている。黄色いトラクターが彼方の牧草地で時折見えかくれしたりする。井純二君（一八才）。彼は組合からこ

草地酪農に描く夢

―阿蘇郡産山村農協の井純二君―

腰弁て牧場へ通勤 産山村農協酪農部山鹿区牧場は、県の構造改善事業の一環である大規模草地改良事業区として、昨年の夏発足した。こ